

岐阜県小中学校教育研究会特活進路部会

平成29年度研究テーマについて

1. テーマ設定にあたって

岐阜県の人口においては、大正9年の国勢調査から増え続けていたが、2005年（平成12年）を境に減りつつある。2010年に210万人であった人口も、30年後の2040年には、158万人になると予測されている。また、年齢層において言えば、65歳以上が2010年で24.1%、2040年で、35.9%と予測されている。待ったなしの超少子高齢化がやってくる。少子高齢化によって、所得格差によって貧困率は上昇し、雇用格差によって家族構成も核家族化、1人化が増加し、教育格差によって、学力差は激化の一途をたどると予想される。こうした背景は、将来への不安が増幅するとともに、就職・進学を問わず、進路を巡る環境の厳しさも計り知れないものがある。また、反社会・非社会行動の低年齢化と激化、いじめ（NSF等の普及による）や不登校、自殺などの深刻な問題の背景にもなっているであろう。

このような状況の中、子どもたちが「生きる力」を身に付け、明確な目的意識を持って日々の学業生活に取り組む姿勢、激しい社会の変化に対応し、主体的に自己の進路を選択・決定できる能力やしっかりとした勤労観、職業観を身に付け、それぞれが直面する様々な課題に柔軟にかつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくことができるようにすることが求められる。そのために、我が国において「キャリア教育」という文言が公的に登場し、その必要性が提唱された。

「キャリア」とは、人は、他者や社会とのかかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員等、様々な役割を担いながら生きている。これらの役割は、生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり、つながっていくものである。また、このような役割の中には、所属する集団や組織から与えられたものや日常生活の中で特に意識せず習慣的に行っているものもあるが、人はこれらを含めた様々な役割の関係や価値を自ら判断し、取捨選択や創造を重ねながら取り組んでいる。

人は、このような自分の役割を果たして活動すること、つまり「働くこと」を通して、人や社会にかかわることになり、そのかかわり方の違いが「自分らしい生き方」となっていくものである。

このように、人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが、「キャリア」の意味するところである。

そして「キャリア教育」とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」である。キャリア発達とは、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」である。キャリア教育は、自分が自分として生きるために「学び続けたい」「働き続けたい」と強く願い、それを実現させて行く子どもの姿を目指すものである。

毎年の中教審の変化により本部会のとらえる「生き方指導」に近づきつつあると考える。文部科学省が挙げている、今後の学校におけるキャリア教育が、職業教育の在り方として、「基礎的・汎用的能力」を各学校の児童生徒の実態を踏まえ学校として育成しようとしている。「基礎的・汎用的能力」として、4つの能力のフィルターを通して教育活動をとらえ直すことを求めている。

- (1) 人間関係形成・社会形成能力：（例）他者の個性を理解する力、コミュニケーション・スキル、リーダーシップ等
- (2) 自己理解・自己管理能力：（例）自己の役割の理解、自己の動機付け、忍耐力、主体的行動等
- (3) 課題対応能力：（要素）情報の理解・選択・処理、課題発見、計画立案、実行力等
- (4) キャリアプランニング能力：（例）学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、生き方の多様性の理解、将来設計等

この4つの力は、キャリア教育として達成すべき課題（例：・コミュニケーション能力の向上・肯定的な自己理解の促進・将来を設計する力の育成・社会生活上のリスク対応・勤労観、職業観の形成支援・社会に参画する力の育成）と多様につながりながら、各学校での行事や学級活動、生徒会活動等で育まれるもので、特別活動が深く関わっている。特に（4）は、特別活動の領域における進路指導の重要性を強く感じるからである。

中学校の進路指導においては、自己理解・進路の計画・進路情報・価値観（勤労観・職業観）の4つ観点を各学年で繰り返し特別活動の中で設定（「生きる」進路指導主題系統図 参照）し、進路学習を進めていくことが必要である。

新学習指導要領においては、小学校の特別活動の目標を「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。」と述べている。「自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」の部分は、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする多様な集団活動を通して、望ましい認識がもてるようにするとともに、集団の中で自己を生かす能力を養っていくことを示している。例えば、集団の一員として、目標をもつこと、将来に夢や希望をもって現在の生活を改善しようとする、協調性や責任感、規範意識を高めること、人権を尊重することなどにかかわる自己の生き方についての考えを深め、その大切さを認識できるようにすることである。また、これらのことにかかわる自己のよさや可能性を集団の中で生かしてよりよい生活を築いていくことができるような能力を育成することである。「人間としての生き方」や「自己を生かす能力」は、進路指導に強く関わってくる言葉でもあり、中学校の特別活動における進路学習の重要性を位置づける言葉といえる。特に前指導要領から付け加えられた「人間関係」については、よりよい人間関係を築こうとする自主的実践的な態度の重視を示している。中学校では「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」としている。目標の「集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする」の部分は、自己の所属する様々な集団に所属感や連帯感をもち、集団生活や社会生活の向上のために進んで力を尽くそうとする態度や能力を養うことを示している。生徒個人は、様々な集団や社会の一員として生活しているが、この中で各自の果たす役割は何か、また自分ほどのような責任を果たさなければならないかを自覚することは、集団全体の発展にとっても、個人の成長にとっても、将来社会人として自立していくためにも大切なことである。このようなことを経験する場として特別活動があるので、このことを目標の一つとして取り上げている。

以上を踏まえて、特別活動や進路指導の視点から、本会のあり方について考える。

人の生き方や進路には多様な選択の可能性があるが、決して一様ではない。人は、自己の個性を自覚し、これを伸ばすとともに、多様な生き方、進路選択肢の中から、自己の個性を十分に発揮することができる生き方、進路を選ぶことによって、生きがいのある、充実した人生を築くことができる。

そうした個性を、集団生活の中において伸長する場が学校であるが、児童生徒たちは仲間との人間関係の構築に弱さを見せている。新学習指導要領等でいうところの「言語能力」や「表現力」の低下に起因するところも大きいだろう。また、いじめや不登校などの問題も依然としてなくなる。子どもたちの精神的、社会的自立が遅れる傾向にあることは明らかであり、小中学校においても、キャリア教育の視点をも含めた「生き方」について考えを深め、自己を将来的に生かす能力が強く求められている。

一方、新学習指導要領が実施され、現場では教科の授業数の大幅な増加により、もっとも大切にすべき特別活動の時間が減らせざるをえなくなり、積極的な生徒指導を実施していこうとする上で、制約される可能性がある。特別活動を中心とした集団生活を通して、児童生徒は、その社会性を育てていくものとする。我々特活進路部会は、これから起こるであろう問題点に対して、実践・提案を積極的に進めることが必要である。話し合い活動・自己を見つめる活動・仲間と共に喜び合う活動、そして、将来の「生き方」を考える進路指導（キャリア教育）

を重要な柱としていく必要があると考える。

特別活動や学級経営のねらいは、最終的には児童生徒の自己実現であろう。集団の中で個の変容を図るべく、様々な教育活動を意図的に仕組んでいくことが私たちの務めであるとも言える。その中核をなすものが、進路指導（キャリア教育）であるという立場で、「一人一人の児童生徒が、自己を見つめ、自己実現に向かって努力し続ける力を持つことができる」ようにするための指導方法の創造や、評価の方法と場を明らかにしていく必要がある。

2. 児童・生徒の姿

前述のように「生き方指導」という側面から、児童・生徒の実態、めざす姿を考える。

(1) 児童・生徒の実態

- ① 現在の生活について見つめ、短期的な目標を持って取り組むことのできる児童・生徒が多い。
- ② 自分の考えを進んで発表することを苦手とする児童・生徒が多い。
- ③ 決められた活動には取り組めるが、必要な活動を生み出すまでには至っていない。
- ④ 自己や他者の「よさ」に目を向けられるようになってきたが、まだ、それを生かして生活し、活動するまでにはいたっていない。
- ⑤ 自己理解が不十分で、より高い目標に向かって取り組もうとする姿勢に弱さがみられる。
- ⑥ ネットの普及による情報化社会の中で、進んで情報を収集しようとする姿勢が出てきたが、生き方を主体的に選択する能力の弱さから、その情報を十分生かすところまでには至っていない。
- ⑦ 活動面で集団との調和ができず、他とのかかわりの中で、共生するためのコミュニケーション能力が不足している。
- ⑧ 活動の目標や計画立案および活動の振り返りや反省等の話し合い活動を自主的に運営する力が弱い。

(2) めざす児童・生徒の姿

- ① 自ら課題を見つけ、仲間と互いの考えを交流して考えを深めることができる。
- ② 自己や他者の「よさ」に気づき、積極的にその「よさ」を生かせる。
- ③ 夢や希望を持って、その実現に向けての長期的な計画を立て、努力し続けられる。
- ④ 学ぶことや働くことの意義を知り、進んで活動に取り組める。
- ⑤ 国際化・情報化・高齢化の社会を迎え、将来の自分のライフスタイルを創造しようとする。
- ⑥ 知識を得た上で、体験活動して「生きる力」を身につけられる。
- ⑦ 情報社会の中で、知り得た情報を精査し、役立てることができる。
- ⑧ 行事などに積極的に参加し、自ら計画などの話し合い活動に関わっていける。

3. 研究テーマ

こうしためざす児童生徒の姿から実態をとらえてみると、児童生徒たちが「生き方」に対する学習に十分取り組んでいないことや、児童生徒たちが自分の「よさ」を生かして自分の志を大切に生きていこうとすることが十分でないと言える。

また、学校における生活の基盤である学級集団などの中で、集団不適應などのさまざまな姿を見せること（コミュニケーション能力の不足）から、特別活動の原点に立ち戻りながら、21世紀を主体的に生きる児童生徒の育成につながる指導を創造する必要がある。

そこで、

平成29年度 県小中学校教育研究会 全県テーマ

「生きる力を身に付け未来を切り拓く児童生徒の育成をめざす学校教育の創造」

- ①児童生徒が基礎・基本的な知識・技能を確実に習得するとともに言語活動を一層充実し思考力・判断力・表現力をはぐくむ指導改善の推進
- ②児童生徒が自己肯定感を高め、規範意識をはぐくむ教育の充実
- ③児童生徒が自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的な学びをはぐくむ教職員の資質・能力の研修の充実

を受け、昨年度同様、「志ある者は事竟に成る」「少年よ大志を抱け」にあるように、成し遂げたいことをもって社会に出ることを目指す指導を目標にしていきたいと考える。

以上を踏まえ、本部会においては、本年度から次のような研究テーマを設定した。

仲間とのかかわりの中で志を抱く生き方指導

特活進路部会としての指導内容は、特活領域の指導と進路指導（キャリア教育）を位置づける。それぞれの内容において、「生き方」を指導していく場はあるが、本部会においてはこれまで、進路指導を学級活動の場においてきた流れと、児童生徒が主体的に生活を作り上げ、生き方を考えさせていくために大きな成果を期待できることから、学級活動の場を中心に研究してきた。

今年度も、特活領域全体に幅を広げつつ、キャリア教育につながる視点をもって、児童生徒の社会的自立につながる力を確かなものにしていくため、上記の研究テーマのもと、各地区・都市・各校・各会員で、それぞれの実態に応じた場で、「生き方」指導を追究していきたいと考える。

4. 研究の視点

(1) 活動の過程と指導方法の工夫改善

- ① 学級活動における指導事項を精選し、指導の内容を明らかにした指導計画を工夫する。
- ② 児童会や生徒会、行事などにおいて、児童生徒の主体的な活動を計画し、共に活動する喜びと達成感から、新たな目標に挑戦していく態度が持てるように指導方法を工夫改善する。
- ③ 進んで自分や進路など生活についての情報を収集し、自分の生き方を見つめ、体験的な活動に取り組む中で、将来への夢や希望を持ち、志を抱く指導方法を工夫改善する。
- ④ 自己を伸ばす能力を養うとともに、キャリア教育推進のための学習プログラムのより効果的な指導の在り方を工夫改善する。
- ⑤ 「のびる」を活用した学習を進め、指導内容や指導方法の工夫改善を求める。
- ⑥ 「生きる」を活用した進路学習を進め、指導方法の工夫改善を求める。

(2) 「生き方」に関わる情報収集・活用の力を高める指導方法の工夫

- ① 将来をよりよく生きようとするために必要な選択と適応の力を高めるために、児童生徒にとって必要な情報の提供のあり方について模索する。
- ② 児童生徒による情報収集・活用の力を高める指導方法の工夫を図る。

5. 事業

- (1) 進路指導学習や特別活動の指導方法に関わる交流を進める。
- (2) 「夏季ゼミナール」を開催し、体験活動や授業実践の交流を行い、指導方法や研究の成果を確かめ合う。
部会への加入者のみならず、部会以外の方々や大学生を含めた参加希望者に広く呼びかけていく。
- (3) 小学校における学級活動のための冊子「のびる」の実践的研究を進める。
- (4) 中学校における進路指導のための冊子「生きる」の実践的研究を深め、改訂作業を進める。